



4341
3

交際を以て鑑をこし二

送りお向の一面の並松よきありやうとゆい麻ありけは儀よき芝居の過え

せん強出村とも交くあり二百日多うれあり幕屋座れよきあり

ありよかりあり幕めり

まごりてれ並松のけりお家の養うり繁松座れよきあり

自由な坑油及と大坂の方うらひよこへ、あつたてらひんくそ毛の親に約

あひの三ぬそ人のつづろぶくも年が長かんであつたり斤よありお西む

斤よありなつまのよあふぢらうりぢらうりあつたり何ぢむ母のお籠り付

添くたたくさかんをなまへ

せいナア

三

せいナア



松

ハ 刊見取改の立場でわざうらほりぢやうご代中つて下さりません
 淨 神ごまごたまの肉よりも 穢 極めのより大坂を著てくう
 こころの ンイまじや務めごころをんとナアハよハ 刊見取のわざと
 うねがなりぬとぢやあふとまで中つて下さりませ 穢 刊見取
 こころ安んぬと残を交ふりち今をぬ大坂でなほは後まごころの
 ハ 刊見取のけりけりぬのぢやナア ンイや交とらあや務めが悪い
 大坂のどくかたのぢや 穢 ンイやとね長町をぞたづねて ンイ
 されちしきぬのぢやまごころのよよくまでこして下さりませ
 穢 ハテまつこころ小残がまいらふよ ンイまごころおのころの
 表の中 穢 ンイコリや舞おつる武士ふ向つてくうとらハ ンイまごころ
 士ぢや 穢 武士より行ぶぢやありまぬ丸舞ぢやぢやハ ンイまごころ

うらうのてめごころあんなあつたナアお侍 穢 合長ぢや 穢 けりあつる
 悪事の因さうごころとちうとちうとさき肉より取らる穢 悪意ごころ
 又揉まりむごころとせくごころも刃の恥と著うつむいてくう
 穢 何でまごころまごころのうご代舞用してらぢやあつたハ ンイまごころ
 こころのまごころで舞用舞用 穢 三まごころとまごころ 三 ンイ
 めつごころはして後悔まごころ 穢 物を横合うつごころ左平次ごころ
 ンイで行めごころ ンイやまつてのりく 穢 新くわりやごころ
 このぢやうごころながうつごころはごころは元のあつたごころ
 ところどころでまごころさん著のうかぢやいよまごころごころ
 てかご代ごころごころのごころめぢやハ 穢 極ごころ二百五十三 三 ンイ
 ちうごころまごころごころごころごころごころごころごころごころごころ

松林



松林



松

どもけ親仁が尻おどりやなまうひさつあやうま三「ヤアコリヤ尻お
 三」このつりなほ「おはつぬう尻おどりまうひさつあやうま三出九
 九十九出入あうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま
 うまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま
浄「んさうきんをうまうまうまうまうまうまうまうまうま
浄「まサアこようま三「つうまうまうまうまうまうまうま
三「つうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま
 めふあふあうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま
 さうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま
 精いのあうまハ「つうまうまうまうまうまうまうま
三「つうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま
 三」

十三ノ四

松

とろろろ元のおせうまうまうまうまうまうまうまうま
 のまのうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま
 三「イヤそあうまうまうまうまうまうまうまうま
 バ長町三といつとまうまうまうまうまうまうまうま
 三「イヤそあうまうまうまうまうまうまうまうま
 まうまうまの三「三河屋のまうまうまうまうま
 をうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま
 中まうま三「ハア、まうまうまうまうまうま
 めうまうま三「イヤコリヤあうまうまうま
 うまうま三「イヤコリヤあうまうま
 白くまうまうまうまうまうまうまうまうま
 三」

お突止ふとんじほしうきせう出掌とねいよんうに志ぬせうぞいのり
 ろんたぬいせいのち中まよふおうちも坊主をほきて明林ぬ糸
 こはしうぐ下向のおそいにてりきりと坊主めがだける新家の登
 飯あつち中ういて大分尻布屋よりせりおの物おの三ぬがの
 ろこといつてそ中いいう志中りませ 破 乞ひ書きぬくのふい塊で目と
 くらしうふ大坂へ来るおふれおで元元のは目よをり何うとお世帯お
 歌りふお トのうみ 二 可い乞くを挨拶いつでもあつたアアふり
 ませあふく 破 志うふお詞よ志うふいともかくも破 坊お三ぬぬ
 と中う後刺しとぬおふ 二 可アくふあふりませい 後 尻布屋と
 しくいせうと行 ト三ぬ見送り世帯 三 かの人もよふおであまふあふく
 子連れう坊う明こイヤ明いぬうが世帯せいのめ来そふまりの志や

幸いくまで至る 二 かいさゆうてりおのしり
 追付ぐりおふ 三 可アさうふいまも入まい大坂うり至ふとんじほし
 まやぬんどううがうらまちつとらして下さる 二 可いくお安い
 一ぬくおよりうのりませ 三 せんあうゆらうらうし中 二 卜座の
 二 ころと交をかりおを結る程よくごうとくそりや料人トやと
 刃る人も十がれツいんごようよまぶるるを引きくうの志大ま入情を
 御意とたのその御意小深ぐとこまはらまじぬ我いよそのの生洲の真
 仲よせり知地よりけいどの板目りそ目の南番は法のごく因人が
 なることしせ 代友 家系縄とゆりせ 二 可ア トのうみ 代 志七ま一ぬよ
 くれしうい屋敷よわつく物松を汁玉湯を天ま交あや後うり
 去年九月十二日 びお申 大志作 志志のかけいよよと負せ双方共

松林



團十九良兵衛

けいせいのきりぎりす

松



大老の儀

劫も通させし骨打もきくまふそまのりうおころるの風来人は何事と
 言ふこころのも田でさうこれ情けを大や奪がうの中のかく
 押ひ出さるも是がうらふまごそのうへひうらまらるる男はたさ
 うらう女は死換そんまあまのせまうりさうさうさうさうさう
 サア後を尾へいれ流玄のきせふサア押やいなと 耳の中
 しいまよひまふマアまふまふんせハテアあてししあましく
 コリヤそのよめはあまきんあくるまふ イヤしくさふてもい
 ろてもの中やしく 耳の中であらううらうであらうがつまていん
 で女度ふまらるるさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さのやどやしくさうまふんせまふ 夜も昼も引付つめ
 ドサアさうさう 浄 台座をぬきのひりむん引つりのうらうさうさう

おハテおまののりまの依寄ちうが利統ぶつこのまんど小孫が
 あらまふ アイタ〜コリヤさうさうさうさうさうさうさうさう
 おまごまご 耳と安なる利玄のまびんあまの着月代
 サア押のりやうふ家うらう安物さう 耳七でまをさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 こまんといれいマアけてさうさうさうさうさうさうさう
 のくさの サアうぬいさうさうさうさうさうさうさうさう
 耳 耳でもねまにさうさうさう コレこまさんあのお綱系を
 お中しと吹浦さんお中のシテ磯く悪女ふあはしと 耳
 その磯女よありやとさうさうさうさうさうさうさうさう
 おつと サアまのよるさうさうさうさうさうさうさうさう

松林



一寸徳言清

松林



壹七九三

女房おうぢ

と丸 一ホ、コリヤ又身があらつて面白そんまうはは後くをふうい
 あり 今をふすりわふ 一利とふ入のまきうりあ 一うきういせ
 おひとひるも右片もふんんと尻引くげ出入花さく折も折竹の
 運さよ新家うう運ひふおちちうぐさひりらまぶうこそや又
 コレ不常さう志中さくいつともさうぬけうも合のうがらつとめ
 潜とぶさゆけとぐ中うともぬはねもあうぶらつれつて元
 が中へよこおとじてとそん人のうせともまるまどあうぬれよの存子
 又走りあつ トまじりいつくありやうちあうちあう
 のを食めちまはたうその人ふゆでふひうの人ではめ意か者め
 ヤアこりやおねがねでらうおら 一ひまうく 一おねがり入らう
 付で出入のに 一おひまうり 一コリヤ女房おちやんと合点ぐいりぬ

あいつとどおして見まつてわろぞ 一見まつて産で何とせふそい又後
 こいつが破く悪奴お細柔なううおゆらううさねぬを付の只ひ付
 ならうう 一悪奴で罪人のえんらうと身のうをばあつとたのんで
 たがお耳うまめてとくにおぬりおねがねのおねがねをううひよあの布
 こままごそのとよおひも何のまううゆめは形が申文 一おん
 一悪く憎の申う悪の悪悪とて破く悪奴ふれをううは値がら
 尻とりつ悪あうれの畜生めりあゆらうさねぬ 一おねがね
 破く悪奴とらふを彼中出のおねがねを悪あうの悪あう 一ヤ
 そまおちやふらうううぬ トまう 一ヤアくまうくくせりや破
 く悪奴といふのが悪あうの悪あうハアあううんごく悪あう
 も彼中出の悪あうの悪あうの悪あうの悪あうの悪あうの悪あう



本
八月
將
梅
年

